

広報

No. 114

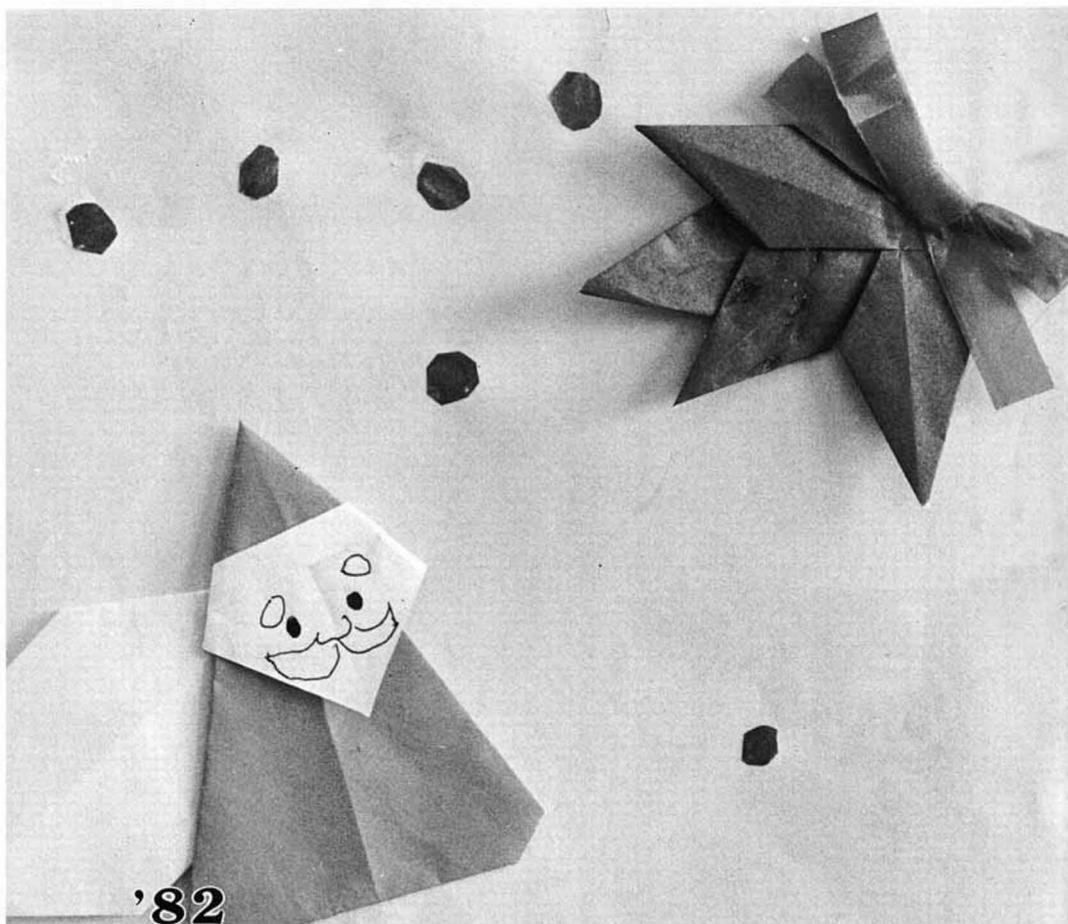
カド

昭和57年12月15日

発行・編集 国見町企画課

おもな内容

| | |
|-----------------|-----|
| 「障害者の日」に…………… | 2～5 |
| 消えた峠路をたづねて…………… | 4～5 |
| おしらせ…………… | 6～7 |
| 公民館だより…………… | 8～9 |
| わだい…………… | 10 |



'82
12月

メリークリスマス!

12月16日公民館で、母と子の公民館活動の指導員 内池和子さんが、子供たちにクリスマスカード作りを教えます。素敵なカードをたくさん作って贈ってね。
(写真は教材のひとつ)

りましょう (町民憲章から) ♪

「障害者の日」に



つよし
宮澤 右さん (宮町南・46)

病気のため幼い時から両下肢が不自由で車いすの生活だが、その障害にもめげず毎日元気に働いている。佐久間紙工(株)に勤めダンボール箱の組み立ての仕事に精をだしている。この会社に勤めて27年、佐久間弘社長は、「まじめで、休んだこともない。障害を克服しての努力には頭が下がる」といつている。性格も明るく、職場の仲間にも頼られ親しまれている宮沢さんだ。趣味は釣り。今年は公園沼で16匹のコイを釣り上げている。

三十人に一人が障害者

全国調査による推定では、身体障害者が約二百二十万人、精神薄弱者が約四十万人、精神障害者が約百万人、計約三百五十万人の心身障害者がいます。国民の三十人に一人が心身に障害をもっている勘定になります。軽い障害や慢性病の患者、寝たきり老人などを含めると、その数はかなり増加するはずです。

国見町でも身心障害者は三百人以上います。障害を持つ人の問題は、単に障害を持つ人だけでなくわたしたち一人ひとりが、自分自身の問題として考える必要があります。それは、共に生きる福祉連帯社会の実現を目指す私たちの努めだからです。

障害者への理解はまず関心を持つことです。無関心は何も生み出しません。

たとえば次のマークの意味をご存知ですか？



このマークは、手足の不自由な人が利用しやすい建物・施設であることを示すシンボルマークです。図柄は車いすと障害者をデザイン化したもので、国際障害者リハビリテーション協会(本部・ニューヨーク、加盟国七十カ国)によって決められたものです。



このマークは、そこに手話のできる人がいて、耳や口の不自由な人たちが利用しやすい窓口であることを示すシンボルマークです。図柄は耳をデザイン化したタツノオトシゴで、財団法人全日本ろうあ連盟のシンボルマークです。

手助けはさりげなく

障害を持つということは身長や運動能力の違いと同じ個人差の一つです。

ですから、手助けするときも、「障害者」だからでなく、困っているから手助けを「エチケット」の基本です。自然な態度で接しましょう。

わが国では、国際障害者年だった昨年、十二月九日を「障害者の日」として宣言しました。この日は、一九七五年(昭五十年)に国際連合で、「障害者の権利宣言」が採択された日です。この権利宣言は障害者の基本的人権と障害者問題を示したもので、国連の障害者問題に対する今までの決議や宣言の集大成といえるものです。

障害者の問題は、社会的な連帯意識の下に一人ひとりが関心を持ち、解決してゆくことが大切です。障害を克服し、自立できるような環境をつくり、援助をしてゆくことが障害者福祉の大きな課題です。この機会に障害者問題を改めて考え直してみましよう。



自立

阿部 キユさん (第三・57)

阿部さんは腰つかりエスとの闘病生活が長い。今も支えがなくては座ることができない。長い歩行も困難だが、この障害を乗り越え和裁の仕事で生活を支え続けている。自立更生の模範として表彰も受けた。

不自由な体を座いすで支えながらの和裁仕事の合間には趣味の書の練習に余念がない。身障者の作品展では、昨年今年も優秀な成績を収めている。号は芳草。「俳句も読書もやってみたいが、仕事が大事ですから……」。

十月八日、県福祉大会の席上、町身障者会会長の佐藤健蔵さん(駅前・七十四歳)に「晴川章」が贈られました。この章は、県身体障害者福祉会会長の影山晴川氏が、障害者で自

佐藤 健蔵さんに
晴川章



立更生し、よき社会人として社会福祉に貢献した人に贈っている権威あるものです。長年、身障者福祉に尽力されてきた功績が認められての受賞です。佐藤さん、おめでとございます。

あたたかくたすけあう町をつく

12月9日「障



岡崎 武治さん
(宮町南・52)

障害者となつて

八年前のある日、交通事故でせき髄を損傷、今まで考えてもみなかった障害者としての生活が、心身の痛みを伴って始つたのです。障害者になつてみると、回りの眼が気になります。それは、冷たい眼が多いからです。「平等なんだ」といいたくなります。障害者は、人知れぬつらさと闘つています。私も「人に負けても自分

に勝て」と、自分にいきかせています。障害者が常に困難と闘つていることを理解していただきたいと思います。行政にも暖かさを望みます。たとえば、道路の端に段差があれば車いすの場合たいへん苦勞します。ちよつとした配慮が欲しいと思います。また、障害者の場合、同じ境遇の仲間との交流は、悩みを話し、激励し合える点で大切で、近間にもそんな催しと場があればいいのですが。将来を明るく考えたいのです。(談)

ひとこと

障害者を持っている人たちとの交流には、「同情」や「あわれみ」といった高所から見下す感情があつてはだめです。それらは、一種の差別でもあるのです。私は、手話サークルに入っていますが、そこでは、ろうあ者も、同じ仲間同志です。ボランティア活動なんて



菊地 忠良さん
(手話サークル・24)

みんな仲間です

に選んだり、行動した中で覚える方が身に付きますね。手話を覚えたいと思つたのは、次の事があつたからです。知り合いの家でございそうになつたことがありまして。料理を作つてくれた方は障害者のお姉さんでした。お礼をいう術を知らず全く残念に思いました。手話を覚えてみませんか。いい仲間がいっぱい増えますよ。(談)

いわれると心外です。お互いに言いたいことを言い合える付き合いをしなければと思つてます。手話の技術も、一緒



▲つづら折りの急坂（旧街道）



▲旅人を見守る野仏



▲新道開さく碑（旧小坂峠道入口）

奥州道中の桑折宿から分かれ、小坂峠を越えて裏日本に通ずる、一本の交通ルートがあった。郷土史研究家の菊池利雄さんの案内で、旧山中七ヶ宿街道の一部小坂峠道を歩いてみた。

◇

小坂の町並みを過ぎて五百百ほど山に登ると、五光会寄進の巨大な赤鳥井が道を誇いで建っている。それを過ぎてまもなく猿子沢と狸石川の合流点がある。ここが旧山中七ヶ宿道の難所小坂峠への登り



口である。

今はこちら左に向って、福島下戸沢線として改良された、全面舗装の快適なドライブウェイが峠に走っている。

◇

慶応二年に新道を開削する前は、胸突き八丁といわれる峻しい急坂であった。幕末の記録によると、佐竹（秋田）酒井（鶴岡）津軽

（弘前）など裏日本十三の諸公がこの道を通って江戸へ出たとある。猿子沢と狸石川の合流点上のの中茶屋があったという場所は、福島下戸沢線の改良でこんもりと盛り上り、その中に砂防指定地の標柱がひっそりと建っている。上りの道中で賑った往時の面影はない。

登り口左側の溪流わきに、野仏



小坂峠・羽州街道変遷図（国見町森林施行図と小坂村地図および実地踏査によって作成 菊池利雄）



山田音羽子
お国替絵巻より

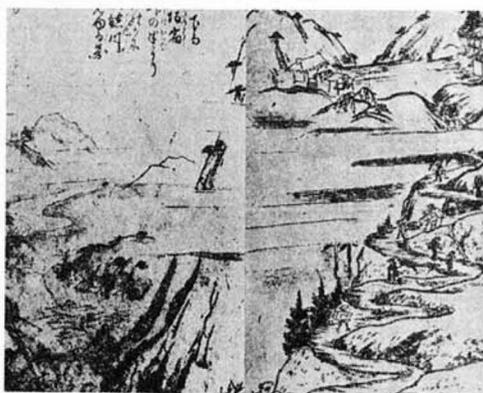
- 小坂峠・小坂宿関係略年表
- 年
- 六四五（大化二年頃）
大化の改新頃、小坂峠新宿峠越えて多賀城移転前の陸奥国府と置賜最上兩郡の都術を結ぶ道（後の七ヶ宿街道）が開かる？
 - 二八九（文治五年）
阿津賀志山の合戦に小山朝光鳥取峠を越えて藤原軍の後陣に攻め入る。
 - 一三八〇（天授六年）
伊達宗達小坂峠越えて置賜郡に攻め入り長井道房を亡ぼす。
 - 一五七九（天正七年）
十一月三春城主田村清顕の娘愛姫伊達政宗にとつぐため小坂峠を越えて米沢城に向う。
 - 一六〇四（慶長九年）
幕府一里塚の構築を命ず上杉藩により奥州、羽州梁川道に一里塚が構築される（小坂宿入口に一里塚）
 - 一六三三（元和八年六月）
秋田藩家老梅津政景幕府の意向を受けて桑折一関一山形間の街道宿町を六十間幅の縄で丈量す。
 - 七月七日政景小坂宿に泊り小坂峠を越えて帰国す



▲小坂峠茶屋からの景観



▲飛不動尊



▲小坂の難所（山田音羽子お国替絵巻より）

が二体、おとづれる人もないままひっそりと立っている。登り口は現在道路が低くなって、高くなつた川からこぼれ落ちる水が、かすかなせせらぎの音を響かせて道を流れている。

慶応二年に開かれたという新道と途中まで同じに登る。最近風倒木の撤出に使われたとみえて、道は割合されいである。急ではあるが歩きよい。

わずかに道形がわかるのみである。旧道は比較的歩きよい。この道はいつごろ開かれたのかは、もちろん明らかではないが、近世の交通路として開かれたのは、慶長初年頃と推定されている。参勤交代路として使用されるようになったのは、寛永元年（一六二五）佐竹義宜備国のとき以後のことだとい

一昨年前から続いた豪雪で倒れた、杉、雑木の間を抜けて、永远是年月にあちこち崩落してはいるが道肩が部分的につながつて、はるか頂上に向つている。ここから

は所謂つづら折りの峻険な急坂が峠の茶屋まで続いているのである。

◆ ◆

菊池さんの話によると、七ヶ宿街道は出羽方面諸大名の参勤交代の道路だけでなく、天領の城米（江戸へ出す年貢米）の輸送と、出羽三山の参詣者の通路としても重要な道路であった。寛文初年江戸の人渡部友意（友以）が非常に苦心して福島から荒浜へ出る阿武隈川水路を切り開き、舟運の工事に成功した。

これによって天領の城米輸送が楽になった。このため多い時には年間四〜五千駄（五千石内外）の城米がこの小坂峠を降りた。また出羽三山信仰がさかんになった近世後期になると、多数の講中が団体を組んで福島方面からこの峠を越えて、出羽に出たといふことがある。

現在は昔日の面影を憶ふべくもなく荒れ果てて、わずかに残る道形の藪の茂みをかきわけて、登りつめれば、信達の平地が一望に見渡せる峠の茶屋へ出る。

昔出羽から七ヶ宿街道を通って小坂峠に立った旅人たちが、開けた信達の野の眺望に、江戸に來たといふはしゃぎようもむべなるかなと思われ。葉の落ちた雑木林の合間に、まっかに色づくサルトリイバラの実が一際鮮やかである。

- 一六五・寛永元年卯月（二十三日）佐竹義宜参勤を終えた。
 - この頃より出羽国諸大名の参勤交代路は金山小坂峠越の七ヶ宿（羽州）街道が使用される。
 - 一六三三・寛永十年）西根上堰開きくさされる。
 - 一六四七・寛文四年）渡部友意、河村瑞賢によつて阿武隈川水路開かれる。
 - 一六四七・寛文四年）高島駒舟等御城米を江戸に運送する。幕領高島の御城米七ヶ宿小坂峠を越え小坂宿の御城米倉に運ばれ伊達崎・徳江川岸より江戸へ積出しが行われる。寛保元年（一七四一）の記録五千八百九十七駄（毎日四百俵）
 - 一七五九・享保十四年）小坂峠道産坂と呼ばれ、大難所なりと江戸道中記に見える。
 - 一八六七・慶長二年）北半田村早田伝之助小坂峠新道を開きくさす。
 - 一九六六・昭和四十一年）県道福島一十戸沢線供用開始
- 参考文献 福島市史料上杉文書上
国見町史料叢書一集・同二集・菊池利雄「分折歴史の道羽州街道」
・七ヶ宿町史料編



昭和五十八年度 就学予定者

(昭和五十一年四月一日)

五十二年四月一日生まれの方)
来春小学校に入学される百八十八名のみなさん、おめでとうござ
います。

健康には十分注意して、入学式
には、みなさんそろって元気を顔
を見せてください。

記載もれや誤字などがありまし
たら町教育委員会までお知らせく
ださい。 ☎二二一(敬称略)

◆小坂小学校24名(男9女15)

- 高橋 雅史 黒田 昌雄
- 遠藤 大輔 遠藤 李雄
- 高野 顕高 高橋 覚英
- 原田 淳一 高橋 裕二
- 林 亨田 村 知佳子
- 後藤 幸枝 赤坂 史枝
- 高橋 陽子 佐藤 文美
- 高橋 友子 後藤 葉子
- 鈴木 ユミ 後藤 志津香
- 後藤 亜也子 朽木 麻美
- 鴨田 美幸 武田 潤子
- 安藤 恵美 安藤 真由美

- 須藤 千秋 田口 友美
- 須藤 香奈子 齋藤 愛子
- 東海林 朋子 菊地 紗織
- 遠藤 里美 草竹 千鶴子
- 赤井畑 美津子 滝川 孝
- 上林 誠 岡田 和喜
- 本田 太郎 岡田 和喜
- 栗野 雅之 中野 隼人
- 渡邊 道隆 佐藤 孝夫
- 齋藤 充弘 平 鈴野 幸次郎
- 佐藤 裕 忍 紺 野 幸次郎
- 後藤 裕 忍 紺 野 幸次郎
- 宇佐美 裕 忍 紺 野 幸次郎
- 安田 洋平 半澤 光秀
- 佐藤 嘉宏 吉田 裕二
- 菅野 敏行 瀬戸 裕二
- 曳地 猛 齋藤 和幸
- 半澤 浩徳 神林 大介
- 須藤 陽 野村 忠宏
- 齋藤 一 佐藤 剛和
- 秦 龍宏 吉田 剛和
- 阿部 高行 菊地 広幸
- 齋藤 慶一 菊地 広幸
- 小早川 雅俊 佐藤 喜也
- 吉田 智史 安積 裕也
- 秋元 逸郎 菊地 義博
- 徳江 憲司 栗原 喜博
- 鈴木 龍也 栗原 征也
- 奥山 貴明 石黒 圭資
- 花輪 康裕 石黒 圭資
- 鈴木 直樹 佐藤 寛之
- 鈴木 成成 佐藤 寛之

- 佐藤 由紀 穴久美子
- 佐々木 三佳子 佐藤 洋子
- 徳江 利香 吉田 晃子
- 佐藤 陸美 齋藤 裕子
- 小村 佐美 野村 優子
- 野村 晴美 田中 順子
- 高橋 睦子 佐藤 順子
- 渡邊 忍 曳地 美和
- 菊地 智美 板橋 麻里子
- 齋藤 由香里 小池 由起
- 加藤 沙弥香 三池 由起
- 佐藤 由佳 八島 律子
- 田中 千恵 谷津 三佳子
- 齋藤 里香 谷津 三佳子
- 八巻 裕志 鈴木 正人
- 大波 秀和 吉田 崇史
- 近野 昇 佐藤 貴浩
- 齋藤 孝史 佐藤 貴浩
- 村上 洋平 村上 晋一
- 村上 崇広 村上 晋一
- 村上 智英 高橋 健一
- 佐久間 友和 實沢 明美
- 佐藤 久美子 武田 恵子
- 齋藤 千春 八巻 穂子
- 高橋 香織 齋藤 峰子
- 大波 ルミ子 佐藤 仁美
- 佐久間 瑞美子 佐野 久美子
- 佐藤 友喜 洪谷 正徳
- 岡田 友喜 洪谷 正徳
- 長谷川 勝行 村上 晃大
- 佐藤 志古 山上 晃大
- 渡邊 秀人 齋藤 友和
- 渡部 達也 佐藤 克利

- 吉田 淳 松浦 金蔵
- 大沼 拓也 阿部 伸也
- 星野 弘光 佐藤 正則
- 森 敦史 大岡 祐子
- 佐藤 理恵 佐藤 祐子
- 鈴木 真恵 永山 真紀
- 永山 真美 阿部 真紀
- 菊池 妙子 阿部 真紀
- 村上 晚子 佐藤 由美子
- 安田 幸恵 吉川 清見
- 佐藤 美津子 松浦 美紀
- 遠藤 咲子 大沼 美紀
- 遠藤 純子 八巻 ゆかり
- 五手 孝 鈴木 仁
- 鈴木 弘幸 佐藤 哲也
- 瀬戸 友義 井砂 由紀江
- 鈴木 美智子 鈴木 亜紀
- 鈴木 佳奈子 鈴木 亜紀

◆大枝小学校9名(男5女4)
現在中学三年生で希望の方は、
東北中学校へ申し込んでください。
※詳しくは「かいらん」をご覧下
さい。

◆修学資金(毎月)
○募集人員 若干名
高専一万円以内
高校八千円以内

○金 額 若干名
大学 万五千円以内
入学支度金(入学時に貸与、一
年以内で月賦で返還)

○募集人員 若干名
○金 額 高校五万円
大学二十万円

昭和五十八年度 幼稚園児を募集

藤田幼稚園と森江野幼稚園では、
就学一年前の幼児を対象として園
児を募集いたします。

希望者は五十八年一月十二日か
ら十四日までの間に、それぞれの
幼稚園に申し込んでください。

その際午前中は授業中ですので
できれば午後二時から四時までの
間にお願いたします。

※詳しくは「かいらん」をご覧く
ださい。

◆申し込み期間
昭和五十八年一月十日から一月
三十一日まで

昭和五十八年度 国見町奨学生募集

当町では、故山田長一氏が町出
身者の育英・奨学のために寄附さ
れた財産などをもとに、奨学金制
度を実施しています。

五十八年も、次の要領により奨
学生を募集します。希望者は町教
育委員会まで申し込んでください。

思い出の写真

半澤家と桜桃園

今、桜桃王国は、全国出荷量の七五%以上を占める山形県だが、

東北地方の桜桃の先駆者は大木戸の、今はない半澤果樹園である。

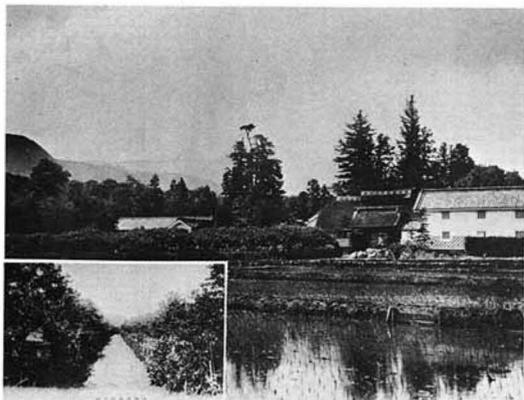
大正期、半澤果樹園は、全国的にもまれな大桜桃園の経営を行い

各地に出荷、都会の市場価格をも左右したといわれた。

当時のことを知る酒井保さん



酒井 保さん



（高城・七十七歳）の話。
「明治期に、三島県令の勧めでりんごを植え、その後、東北では初めての桜桃に切り替えました。最盛期には、十五、六ヘクタールの面積があり、出荷時期には二百人以上の人手で作業したものです。
藤田駅からの出荷作業も夜遅くまでかかりました。広い果樹園の害虫駆除には麦わらを燃やして歩いた思い出もあります
今果樹園は桃、りんご畑となっている。
（写真は、昭和十八年ごろの半澤家と大正期の果樹園。酒井さん提供）

善意の窓

町福祉協議会に

- ◆松浦惣一さん（大町南）から、三万円―故フミさんのご遺志
- ◆菊地あき子さん（大町南）から三万円―故正治さんのご遺志
- ◆天野英子さん（滝山）から三万円―故須賀アキさんのご遺志
- ◆松浦博保さん（秦折町）から十万円―故留蔵さん（三協ハイヤ）社長のご遺志
- ◆樋口弥太郎さん（錦町）から五万円―叙勲記念として

藤田小学校に

- ◆松浦惣一さん（大町南）から二万円―故フミさんのご遺志
- ◆現地一芳さん（本町）から、一輪車・唐鞆・鶴嘴・刈込み鉄

森江野小学校に

- ◆佐藤ヨシ子さん（第四）から二万円―故隆夫さんのご遺志

三町火葬場の年末年始業務の取あつかい

○年末は三十一日まで平常どおり
○五十八年一月一日―三日までは原則として休業します。
一月四日からは平常どおり。
※四日以降の申込みについては、年始でも役場で受付ます。

心配ごと相談日

場所：役場二階相談室（東側入口からお入り下さい）
時間：9時～12時
こまったことや、相談ごとがありましたら、お気軽にご相談下さい。秘密は絶対に守ります。
【相談員】
12月25日(日) 菊地 平助・村上ハツヨ
1月5日(水) 吉田 忠吉・佐久間いち
1月14日(金) 吉田 正雄・渋谷 愛子

たばこ消費税は暮らしの中に生かされています



●たばこは地元で買います。

こよみ

| | |
|-------------|------------|
| 12月 師走（しわす） | 1月 睦月（むつき） |
| 22日 冬至 | 1日 元日 |
| 23日 皇太子誕生日 | 2日 初荷・初夢 |
| 25日 クリスマス | 4日 官庁仕事始め |
| 28日 官庁仕事納め | 6日 小寒 |
| 31日 大みそか | 15日 成人の日 |

今月の納税

- 町県民税
 - 国民健康保険税
- 第四期 第四期

こたつを上手に使いましょう

ⓧ 東北電力





八ヶ月お世話に

なりました

国見町乳幼児学級

零歳から三歳までの乳幼児を持つお母さんの方、よりよい母親としての勉強を目的として、開設された当学級も、去る十一月二十四日、八か月間、十回の学習を終えて、無事閉講いたしました。

八か月間、奉仕の精神で、保育管理に当って下さった、ボランティアの皆様には、容易ではなかった事と思います。少ない人数で約二十名前後のお子さんを、二時間程度、我が子のように見守って下さった皆さんの姿勢には、頭が下がります。

学習内容

学級生の方のアンケートの一部を紹介いたします。

◎講師、準備、内容、すべて恵まれた環境で学習できたことを感謝すると共に、生涯教育の最初である乳幼児教育の大切さを感じ

▲お母さんといっしょに



み感じました。もっと多くのお母さん方の出席を望みたいと思います。

◎第一子の小さい頃に、この様な機会があったら、もっと役に立つたことと、残念に思います。

◎母子共同学習によって、子どもとのふれあいの時間を持つことができ、今まで気づかなかった面を知って、本当によかったと思います。

◎三人のおばあさんが、お孫さんを背おつてこれられ、無欠席で、熱心に講義をメモしていられる姿に、何か教えられるものがありました。来年もお世話になりたいと思います。

次に、ボランティアの方々からの声をのせておきます。

◎このような、恵まれた学習の機会が与えられる、今の世の中の偉せをつくづく感じます。大勢のお母さん方の参加を望みます。私たちも、またお力添え致しますよう。

◎ボランティアをやることによって、自分自身の勉強になることを知り、教えるのことも学びました。

◎子どもは、みんなかわいいものです。お母さん方、どうぞ安心しておあずけになって下さい。健康でいっ子を育つてほしいと願っています。

◎ご協力下さったボランティアの方々のお名前を記して感謝の意を

表わしたいと思います。

(敬称略)

佐藤マチヨ、黒田規寿歌、山本テール、梁瀬貞子、三木小夜子、小西朋子、若林利子、太田栄子、佐久間勝子、佐藤隆子、太田節子、阿部正代 以上十二名
担当 社会教育指導員 早田 精

ゲートボール

に挑戦

婦人教養講座

町婦人教養講座では、十一月十九日体力づくりの一環として、ゲートボールの学習をしました。

ゲームは、皆さん初めてである。講師は公民館吉田主査である。用具の名前、ゲームのやり方などひとりで聞いて、いざ本番!

上手にゲートをくぐす人、持ち時間(ゲーム30分間で第一ゲートを通過できないくらいならながら残っている人など……)。

学級生の中で「おばあちゃんやっていますので、いつも見ていて簡単なだけにでも出来るものと思

っていたが、やってみるといかにむずかしく、又、こんなにおもしろいゲームだとは思わなかったわ!」などの声がかれた。一時間ほどのゲームでしたが今後婦人の方々もどうでしょうか?

案内コーナー

藤工芸サークルへの案内
町民学校修了後、今後も続けてやっつけていきたいという意見が多く出され、月一回、第二木曜日の午前10時/午後3時まで、会費は千円、材料費は別、町民学校に引き続き、半沢敬子先生に指導をお願いしサークルを作りました。手作りの藤作品は個性に富み、ステキなものです。

月一回、公民館の老人子ども室で行ないますので是非どうぞ!

美容と健康

—現代ヨガクラブ—
町民学校現代ヨガ教室卒業生が美容、健康のためクラブを結成しました。

教室開設日、毎週火曜日
時間は、午後七時二十分から午後九時二十分

場所 国見町公民館
会費 月額二〇〇円
入会を希望される方は、火曜日の練習日においでください。

休館日のお知らせ

◎公民館、体育館の両館は、年末年始次のおり休館となります十二月二十七日から一月四日まで

さわやか

見事な演奏

—FTVジュニア
オーケストラ—

十一月二十三日午前十一時からFTVジュニアオーケストラが、町民体育館で盛大に行われた。同オーケストラは、常任指揮者の立花和夫氏（福島市立渡利中学校）を初め小学校四年生から高校生三年生までの約百人で構成されており、当町を訪れたのはそのうち八十一人。会場には、朝早くから小学生たちがつめかけ熱気があふ

れた。

やがて制服に身をつつんだ団員の入場には万雷の拍手。プログラムは、ヨハンシュトラウスの「こらもり」序曲、エルガーの「威風堂々」など五曲を披露した。

さらにアンコール曲の「羨しき青きドナウ」、「宇宙戦艦ヤマト」演奏時には、場内が最高潮に達し耳をかたむけ調子をとり演奏者との聴衆が一体となった。ふだん、生のオーケストラを聞く機会がない子どもたちや町民は、そのさわやかで見事な演奏にいつまでも酔っていた。

団員たちは、関係者が用意して

テールマン に参加して

十一月十八日、福島の民報ビルロイヤルホールで、青年学級のテールマンを学習した。



▲みんなすまして

この学習は、僕の仕事の都合で日程を変えてもらったくらい僕は楽しみにしていました。みんな緊張した面持で席に着き最初に出てきたメニューは、オードル盛合せ四種、殆んどの人がフルコースを初めて食べる人が多く、僕もですが、緊張してフォークとナイフを動かしていたみたいでした。

次にパン、魚料理、肉料理と続き、この頃から僕もワインなどを飲んだりして緊張の糸もどき、フォークとナイフを持って話してはいけないのに、持って話したり冗談も出て、和気あいあいと盛りあがってきました。

青年学級生 佐久間 清人



▲ぼくもやってみたいな

くれた心尽くしの芋煮に舌鼓を打ちながら共に語り、レクリエーションなどで親睦を深めた。なお、その模様は午後六時からのおtv、テレビレポートで紹介された。

おめでどう サークルぼけつと

十一月三十日に行われた県青少年健全育成推進大会の席上サークルぼけつと（樋口典雄会長）は、青少年の部で表彰を受けた。

これは、健全で明るい青少年を育てるために地域で活躍している団体に贈られるものである。「サークルぼけつと」は、昭和五十三年の結成当時より、小学生を対象にした昔しの遊び、スポーツ、レクリエーションなどの指導をしてきた。

現在は、公民館事業の「少年仲

間づくり教室」の年間指導者として、仲間づくりの知識や技術、創作、野外活動などの指導にあたりている。

こうした活動が認められ今回の表彰となった。

「今までの活動が認められ大変嬉しく思います。今後とも勉強し、おやくにたいたいと思います。」と謙虚に抱負を語っていた。



文芸欄

あつかし俳句会

木枯しやさくらもみじは散り急ぐ
虹蜂の興する日和花八つ手
茶の花や観音堂へ迎る道
ことごとくに稲架の田となり冬近し
芭蕉忌に因む一句のこのわず
筆先に思を込めて柿を取る
薄氷思ひきり踏み子の登校
枯葉蘇のからから音し路地昏れる
木枯しや枕辺の書は閉じしまま
展望台人かげ見えず冬の雲
北風やはがれしトタン鳴らし吹く

短歌

一千年守り畏み神明宮
圃場は成りて郷そ栄ゆる

- 奥山 甲二
- 熊田 一陽
- 小野寺 萬水
- 阿部 しげを
- 佐藤 国樞
- 高橋 涌水
- 渋谷 良一
- 角田 昭子
- 羽賀 えい
- 鈴木 幸子
- 原田 ワキ

第四 義祥

戸籍の窓口

(11月受付)

出生おめでとうございます

| | |
|-----|------------|
| 保護者 | 北三東南館東坂表田 |
| 名 | 江谷町 |
| 子 | 徳第宮内大築宮小石貝 |
| 仲 | 夫雄男朗猛夫功之郎則 |
| 史 | 邦次士信俊耕次則 |
| 寛 | 佐藤浦地野島浦木田藤 |
| 沙 | 佐松曳菅寺松鈴早田藤 |
| 麻 | 織子之吉善一 |
| 伸 | 寛高梢 |
| 重 | 沙麻伸重朔 |
| 希 | 希 |
| 吾 | 吾 |

ご結婚おめでとうございます

| | |
|------|--------------|
| 氏名 | 町館市館谷根市川北取市 |
| 島崎小石 | 田原山白築耕山二太山鳥石 |
| 男子 | 一り行美司薫一子之 |
| 年 | 智信き寛明修 清京正久 |
| 野 | 林橋藤浦村部原川藤野野 |
| 平 | 小高佐松木阿北古齋高菅 |

おくやみ申し上げます

| | |
|---|----------------------------|
| 部 | 成四九北東山南町前 |
| 落 | 高第山町滝大木駅 |
| 名 | 巖夫雄吉吉治ミヨ |
| 年 | 81 45 54 52 70 77 63 68 72 |
| 申 | 善隆倉留ア久正フリ |
| 上 | 邊野藤賀藤地浦藤 |
| げ | 渡佐佐齋須佐菊松佐 |

人口と世帯

12月1日現在(前月比)11月中のうごき

| | | | |
|-----|---------------|----|-----|
| 男 | 5,907人 (-4) | 転入 | 11人 |
| 女 | 6,249人 (-9) | 転出 | 26人 |
| 計 | 12,156人 (-13) | 出生 | 11人 |
| 世帯数 | 2,863戸 (+1) | 死亡 | 9人 |

●この街道と小坂峠が開かれたのは、古く七世紀にさかのぼるといふ。中世においては、この街道は、伊達氏が、伊達郡と置賜郡を支配するうえで重要な意味を持った。幾多の兵と馬が小坂峠を越えたであろう。また、天正七年(一五七九)には政宗に嫁ぐ愛姫一行がこの峠から米沢に向って行った。かつて江戸時代には、出羽の十数藩の大名が、商人や旅人が、往來し年貢米や特産物を運ぶ牛馬の列も続いた。

●このような歴史の道がそのまま残っているのは貴重である。ぜひ整備し保存したいものである。北にそむけるみねはすべて雪白うっもりたるを見るもいとすさまじと津村宗庵が書き残した冬の峠路だが、間もなくこの季節がやって来る。T

わだい



さよなら『ひばり号』

十一月十五日の東北新幹線本格開業で、二十一年間親しまれてきた「し特急ひばり」が前日で姿を消した。

昭和三十六年に季節列車としてデビュー、四十七年にし特急(ほぼ等間隔で運行され、自由席がある。ライナー、ライプリー、ライト、ライジの頭文字しをとった)となり今日まで来た。この間利用者は、約六千万人、延べ走行距離は約五千万キロという。文字どおり東北の顔でもあった。



▲ごくろうさまでした(石母田地内で)

阿津賀志山山ろくは、カーブが多いため、鉄道マニアには見逃せない所、廃止の数日前から最後の「ひばり」を撮ろうと遠くからやつて来た人の姿が多く見られた。

おどる銀りん

一内谷沼でコイ揚げ

十一月二十一日、内谷沼でコイ揚げがあった。これは駅前の山一佐藤魚店の佐藤俊一郎さんが沼を借り養殖し、毎年秋に収穫しているもの。

数日前から沼の水を干し、十数人がかりで網を引く。沼に入る人は腰上まで水につかりながら作業なので、岸のたき火が欠かせない。

網がせばまると動めく背びれに大物が引かれる。引き網みを固定、今度はすくい上げる作業。網には尺もが数匹、銀りんをおどらせながら飛びこんでくる。こんな作業が三回で収穫量は四トン半、尺ものコイがざつと五千匹だった。春に放流した十五センチ、約百グラムの稚魚の成長の結果である。ただし、この裏に一日三回のおき入れの作業があった。佐藤さんの話では、春先の雨で成長は順調だったさうである。



▲太めこそわが命

●「峠は決定をしようところだ。峠には決別のためのあかるい憂愁が流れている」。真壁仁の詩「峠」の一節である。旧羽州街道の難所小坂峠も旅人にこんな想いをいだかせたに違いない。

●今日一日、幕末まで使われていた古い峠路をたどった。思いの外、道跡は尾根上にはつきり残っていた。急坂でつづら折りの道は、かみ身にもひと苦労を強いる。汗して峠に立つのは何年かぶりのこと、見慣れた景色も、冬の陽にまぶしく見えた。

●この街道と小坂峠が開かれたのは、古く七世紀にさかのぼるといふ。中世においては、この街道は、伊達氏が、伊達郡と置賜郡を支配するうえで重要な意味を持った。幾多の兵と馬が小坂峠を越えたであろう。また、天正七年(一五七九)には政宗に嫁ぐ愛姫一行がこの峠から米沢に向って行った。かつて江戸時代には、出羽の十数藩の大名が、商人や旅人が、往來し年貢米や特産物を運ぶ牛馬の列も続いた。

●このような歴史の道がそのまま残っているのは貴重である。ぜひ整備し保存したいものである。北にそむけるみねはすべて雪白うっもりたるを見るもいとすさまじと津村宗庵が書き残した冬の峠路だが、間もなくこの季節がやって来る。T

編集日記